

	東京医科歯科大学 工学分野
学部等の教育研究 組織の名称	大学院医歯学総合研究科 (M:110 D:214) 生体材料工学研究所
沿 革	<p>昭和3 (1928) 年 東京高等歯科医学校創設</p> <p>昭和19 (1944) 年 東京医学歯学専門学校に改称</p> <p>昭和21 (1946) 年 旧制東京医科歯科大学設置</p> <p>昭和26 (1951) 年 新制東京医科歯科大学設置 歯科材料研究所設置</p> <p>昭和30 (1955) 年 大学院医学研究科及び大学院歯学研究科設置</p> <p>昭和41 (1966) 年 歯科材料研究所を医用器材研究所に改称</p> <p>平成5 (1993) 年 大学院医学研究科を大学院医学系研究科に改称</p> <p>平成11 (1999) 年 大学院医学系研究科及び大学院歯学研究科を改組し大学院医歯学総合研究科設置 医用器材研究所を生体材料工学研究所に改組・改称</p> <p>平成15 (2003) 年 大学院生命情報科学教育部及び大学院疾患生命科学研究所設置</p> <p>平成24 (2012) 年 大学院生命情報科学教育部を統合し大学院医歯学総合研究科を改組 (修士課程1専攻、博士課程2専攻)、 大学院疾患生命科学研究所廃止 生体材料工学研究所を改組 (5研究部門、1研究施設)</p>
設置目的等	<p>大学院医歯学総合研究科の母体となる大学院医学研究科及び大学院歯学研究科は、医学及び歯学に関する学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を究めて文化の進展に寄与するとともに専攻分野に関し研究を指導する能力を養うことを目的として、昭和30年に設置された。</p> <p>平成11年に、我が国における医歯学両分野での教育研究の拠点となることを目指して、21世紀における国民と国際社会のニーズに応える研究心旺盛な高度専門職業人 (アカデミックドクター) と世界をリードする研究者並びに医学・歯学両分野にわたる境界型医療人の養成を行うことを目的として、大学院歯学研究科と大学院医学系研究科を有機的に改組・連携した大学院医歯学総合研究科 (3専攻) を設置し、翌平成12年に10専攻を擁する研究科が完成した。</p> <p>平成15年に、ポストゲノム時代を迎え、将来の生命科学の発展と可</p>

	<p>能性を広げる「情報論的解釈による生命科学」分野の担い手となる研究者、技術者の養成等を目的として、大学院生命情報科学教育部及び大学院疾患生命科学研究部を設置した。</p> <p>最近では平成24年に、東京医科歯科大学の教育理念となる「幅広い教養と豊かな感性を備えた人間性の養成」及び「自己問題提起、自己問題解決型の創造的人間の養成」の実現のため、基礎・臨床融合型教育システムを構築するなどの研究科内あるいは研究科間における横断的教育体制を充実するとともに、先端医療・歯科医療等の著しい進歩、グローバル化の進展、少子高齢化社会の急激な到来、臓器移植、遺伝子治療等の生命倫理に関わる問題など新たな課題に対応できる人材養成を目指したカリキュラム改革を目的として、大学院生命情報科学教育部を統合して、大学院医歯学総合研究科を修士課程1専攻、博士課程2専攻に改組した。</p> <p>また、生体材料工学研究所の前身である歯科材料研究所は、「歯科材料に関する学理及びその応用の研究」を目的として、昭和26年に設置された。</p> <p>昭和41年に、歯科器材に止まらず、メディカルエレクトロニクス、人工臓器に関する研究を行うため、「医用器材に関する学理及びその応用の研究」を目的として、医用器材研究所に改称した。</p> <p>平成11年に、生体材料及び生体工学の研究を展開すべく、「生体に適用する物質・材料及びシステムに関する学理及びその応用研究」を目的として、3大部門の大部門制に改組し、生体材料工学研究所に改称した。</p> <p>最近では平成24年に、学術的背景の変化と社会的要請に応えるために、生体機能の修復・解析に資する物質及び材料並びに生体工学に関する学理及びその応用のための研究を医歯工連携のもとに先導し、その成果を実用化するための技術の構築と人材の育成を推進することを目的として、5研究部門、1研究施設に改組した。</p>
<p>強みや特色、社会的な役割</p>	<p>東京医科歯科大学は、医師、歯科医師及び医療技術職を養成する学部教育だけでなく、理学及び工学を含めた大学院の教育・研究に重点を置いている国立大学で唯一の医療系総合大学であり、学長の強いリーダーシップの下、密接な学内組織間連携やスピーディーな意志決定ができるという特色を生かして、医歯工連携による教育・研究を推進しており、以下の強みや特色、社会的な役割を有している。</p> <p>○ 修士課程では、医学、歯学、生命理工学を中心とする多分野融合を実現した体系的な教育課程を基に、人類の健康と福祉に関する幅広い知識及び高い倫理観を有し、生体材料・生体工学領域の高度な</p>

学識及び実務能力を持った人材育成の役割を果たす。また、博士課程では、生命理工学と医歯学との融合的学際分野において幅広い教養と国際的な視野を有し、生命科学や生体材料・生体工学に関する高度な専門性と実践的問題解決能力を持った人材育成の役割を果たす。

- 英語だけで単位取得・学位取得ができる生命情報国際教育プログラムや独立行政法人理化学研究所との連携国際スクール、学際生命科学東京コンソーシアムによる大学院間連携教育などの教育改革を進めてきた実績を生かし、グローバル化や医歯工連携・大学院間連携による学際領域での教育改革を進め、生体材料・生体工学分野でグローバルに活躍できる工学系人材を育成する大学院教育を目指して不断の改善・充実を図る。
- 生体材料分野における世界トップクラスの研究実績を生かし、医歯工連携により、生体材料・生体工学の研究領域に関する基礎研究から臨床研究までを積極的に推進する。
- 中小企業向け産学連携セミナーの開催や、生体材料・生体工学分野における数多くの特許出願の実績などを生かして、医療・歯科医療現場のニーズに基づき、実用化を目指した産学連携活動を推進する。
- ライフイノベーション産学連携人材養成プログラムなどの実績を生かし、学際生命科学東京コンソーシアムなどによる、社会人大大学院生や共同研究員の受け入れなどを進め、医療・歯科医療産業の活性化及び人材育成に資する。